

著者、諸橋轍次の素願

諸橋轍次は、「初版」巻一の「序」のなかで次のように書いている。

ただ何分にも微力の身であるから、成果の上には幾多の不足もあらう、欠点もあらう、それらについては江湖有識の諸君子の教生を仰ぎ得れば幸甚である。更に後來、五十年百年、継続して本辞書に手入れする適當の学者が出て、完全なる漢和辞典を大成してくれる事ともなれば、独り私の望外の喜びであるのみならず、これこそ東洋文化宣揚のため学界の一大慶事であると思ふ。私は切にその事を希望して已まない。

さらに、索引巻を除く本体全十二巻が完結した四年後の昭和三十四年（一九五九）十二月、巻十二の「跋」において、「第一巻の凡例に詳述した編纂上の義例は略々之（ほぼ）を實行したが、なほ力の及ばぬ所が多かつた。」として、

・音韻については文字総数の関係上、『広韻』よりは『集韻』を主とし、『説文解字』については多く『段注本』および『通訓定声』によった。

・主力を注いだ語彙の蒐集については、宋元以来の詞曲・小説、仏教語、日本の漢詩文集などからの語彙が数に於いても説明に於いても不十分であつた。

・語句の解釈は、なお意に満たない点が少ない。『新撰字鏡』など古辞書の中から採るべき和訓も

多かった。

等々、数項を列挙した上で最後に次のように結んでいる。

個々の項目については、更に誤謬もあり誤植もあらう。固より制約ある人間の事業に十全は期しがたいと自ら恕する点も無いではないが、従来本書の編纂に好意と鞭撻とを寄せられた江湖の諸彦並に読者に対しては相済まぬとの念さへ起こつて来る。此は完刊を見た今日の我が偽らざる心境である。……残生の凡ては此の書の補訂に捧げよう。

「巻一」刊行以降、諸橋のもとに寄せられた読者からの誤植の指摘や記述内容に関する問い合わせが頭にあったのであろう、「読者に対しては相済まぬ」とは著者としての偽らざる気持ちであったに違いない。『大漢和辞典』の修訂増補は、諸橋の素願でもあった。

戦後の国語改革と『大漢和辞典』

戦後の国語改革は漢字制限・漢字整理（実際には昭和十七年六月に答申された「標準漢字表」の再審議）から始まった。終戦の日から約四ヶ月後の諸橋の日記に次のような記述がある。

（昭和二十年十二月二十四日）国語審議会あり。米軍より国民学校に於ける漢字数を一千五百以内にせよとの指令出でたれば、其の選択を為さんが為也。

米軍よりの指令とは、GHQ（連合国軍総司令部）からの指令を指すが、日記の記述から遡ること一ヶ